

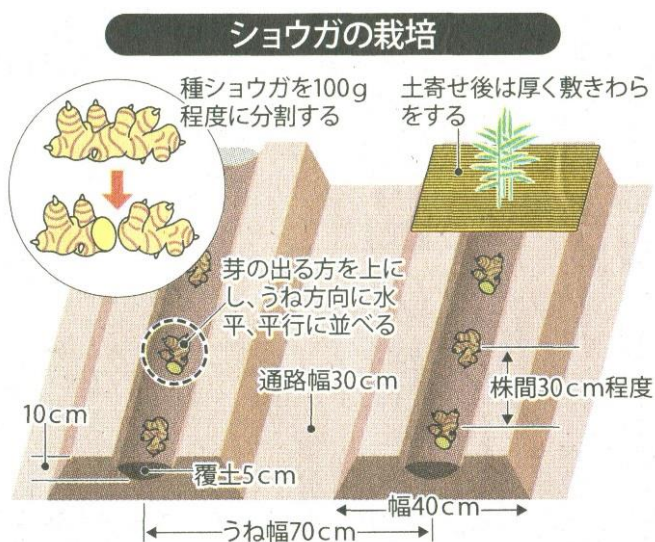
夏季かん水で塊茎肥

——向吉 健二

ショウガの独特の辛味と香り成分は食欲を促し、健胃、発汗、解熱などの効果があります。また、その他の機能性として発がん予防、アレルギー予防に効果があるといわれています。

ショウガは熱帯アジアが原産地とされ、日本へは弥生時代に渡来してきた多年生草本で、生育の好条件がそろえば、長年にわたって生育します。しかし、県本土では冬季の低温で枯死しやすいので、一年生草本と同じ生育をすることが多いようです。

用途により芽ショウガ、葉ショウガ、根ショウガに分類され、それぞれ促成（ハウス）、早熟（トンネル）、普通栽培の作型があります。今回は、鹿児島県で主に栽培される根ショウガの普通栽培を紹介します。



生育適温は25～30度です。15度以下では生育が停止し、塊茎は10度以下で腐敗します。

病害虫による減収を軽減するために連作を避け、3年以上ショウガを作っていない畑で栽培しましょう。細根が深くまで入るので土を20％程度耕します。

植え付け時期は、晩霜のおそれの無くなる4月以降とします。栽培する畑には1平方メートル当たり堆肥2キロ、苦土石灰100グラム、緩効性の化学肥料や有機化成肥料100グラム（窒素、リン酸、カリが15％の場合）を目安として施します。栽植密度はうね幅70センチ、株間30センチとします。

100グラム程度に分割した健全な種ショウガを準備します。浅い溝を切り、芽の出る方を上にして、うね方向に平行に置き、5センチ程度土をかぶせてうねを作ります。植え付け後、除草、土寄せを兼ねて夏場に2回程度追肥をします（1回につき化学肥料30グラム）。なお、1回目の追肥は最初の芽が25センチに伸びたころ、2回目は1回目の20～30日後に行い、十分に土寄せをします。土寄せ後は、夏場の乾燥防止と塊茎の緑化防止のために、地表面が見えない程度に厚く敷きわらを行います。

ショウガは干ばつに弱いので、夏季のかん水は塊茎肥大を促進します。また、強風に弱いので敷きわら後、倒伏防止用のネットを草丈の3分の2程度の位置に水平に張ります。収穫は降霜期の10月下旬～11月中旬ごろの天気の良い日に行います。掘り上げた塊茎は茎葉と根を切り落とす心、乾燥しないよう速やかに貯蔵します。貯蔵適温は13～15度、湿度は90％以上です。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部研究員）